
ドリーム ラヴ

悠夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリーム ラヴ

【Nコード】

N4557F

【作者名】

悠夜

【あらすじ】

高校に入学して色々な期待でいっぱいなあたし。新学期、電車の中で一目惚れした男子生徒を親友も好きになってしまい、渚は思いを伝えたくても伝えれない。そんな歯がゆい恋のラブストーリー。

電車のなかで

あたし、三保志 渚。今日から高校1年生。高校生になったら恋をして、彼氏をつくって、幸せいっぱい的高校生活を期待しつつ電車の車内を見回すあたし。張り切って化粧とかコテで髪を巻いたりしてたから、ギリギリ遅刻するか、しないかくらい遅い時間。

「初日なのに遅刻したら、どーしょお・・・」って呟いてると、
ん！？なんか同じ学校の制服着てる、ホストみたいにカッコいい人発見！しかも1人！チャーンズ！！

急いで鏡でメイクをチェックして、自分の顔に惚れ惚れしてるあたし。自分でもキモいと思うよ・・・でも、あたしモテたよ。顔は結構可愛い方だったし、声もキレイで性格も女の子って感じて男子の間で評判だったって聞いた。

でも、あたし、彼氏はつくらなかった。理由は・・・両親と家柄。両親は父が国会議員で母が弁護士。2人とも恋愛と勉強と外見だけにはうるさくって。

小学校の時に付き合ってるって口を滑らせたら怒られた。でも、もうあたしは子供じゃない。自分の恋は自分で見つける。父と母の言いなりになんかならない！！

さりげなくホスト（みたいにカッコいい人）のそばに移動する。
あたし、ホスト（みたいにカッコいい人）は1年生だって確信した。理由は胸元についてる名札を見たら、あたしと同じ色で名前が書いてあったから。

入学式での出来事

「ふゝ。遅刻しなくて良かったよ。」

と1人で安心してゐるあたし。結局ホスト（みたいにカッコいい人）のクラスは分からなかった。

でも、名字は分かっちゃった！

「森本」だって！下の名前は何て言うのかなっ！？早く話せるようになりたいなあ……。

「ね、友達になるゝよ！ウチ、江崎 悠香。あなたは？」

不意に声を掛けられて焦っちゃったあたし。ダサいね。

「あ……あたし、三保志 渚。」

あたしたち、スグに仲良くなれた。友達できて、良かったあ。

「渚、入学式の会場に行こっ！？皆行き始めてるよ。」

「そうだね。あたし、緊張するっつー！！」

「渚ったら！本当はよっぽどのシャイでしょー！！」

と悠香がからかってくる。

「えへ 分かる？」

入学式で彼を捜してしまふあたし。でも、なかなか見つからないよ。

「ね、あの人がカッコよくない？ウチ、狙っちゃおうかな」 悠香が耳打ちしてきた。

「えゝ、どの人々？」 悠香が指差す方向には……ホスト（みたいにカッコいい人）がいた……。

そんな……どうしよう……。あたしも好きなんて、絶対言えないよ……。

ここはあたしが諦めるべきなのかな・・・？

そんなの・・・そんなの嫌だよ。

せつかく自由になれるって思ったのに。

「渚、応援してくれるよね！？あたし、絶対あのイケメンを彼氏にしてみせるから！！」

悠香はあたしの気持ちを知らずにいるんだね。

ごめんね。あたし・・・ウソついちゃうよ。

「うん。応援する・・・」

もし、あたしも好きって知ったら悠香はどう思うだろう・・・

駅で

ジリリリリリリリリリ！！！！

「っ！？」

目覚ましの音で跳ね起きるあたし。
学校に行くのが、怖い。

「休んでしまおうか・・・」

あんなに楽しみだった高校生活が、どんどん嫌になっていく。

「おはよう、パパ、ママ・・・」

でも、返事は返ってこない。
2人とも、いないから。

1人で朝食を作って食べた。
寂しい。

あたしは、いつも1人。家の中から忘れ去られたみたいに。
トーストにぬったイチゴのジャムが、いつもは甘いと感じるのに、
甘酸っぱく感じた。

「いつてきます」

私は家を出た。

「渚！！おっはよう！！」

悠香が登校中、抱きついてきた。

「渚も7時8分の電車に乗るの！？ってゆーか、意外とウチら、家近くない！？どこに住んでるの？」

悠香の質問に少し戸惑った。

「あ、あたしは××町だよ。悠香は？」

「ああ、ウチ？ウチは○○町！××町の隣町！！偶然だねっ

「だねっ！」

あたし達の会話に間があく。少しの時間のハズなのに・・・ずっとこの間が続くのではないかってくらい、長く感じた。

「そっ、そういえばっ！！」

沈黙を破ったのは悠香。

「あのカッコいい人、森本君って言うんだって。下の名前は・・・」

下の名前は？

とあたしが期待していると、返ってきた言葉は、

「知らないけど。凄くない？ウチが自分で調べたんだあ」

だった。

名字くらい、あたしだって、知ってる。

「ウチ、話しかけてみるから。」

えっ・・・悠香・・・話しかけちゃうの？

「・・・そ、そおなんだあ！！凄いね！あたしも一緒に・・・」

「いいつつ！！」

話しかけてあげようかって言おうとした瞬間、悠香の口から発せられた強い断りの一言。

一瞬、何を言われて、自分がどんな立場に置かれているのか、あたしには分からなかった。

固まってしまったあたしを見て、悠香は慌てて、あたしに、

「ごっ、ごめんね！？ちょっと家で色々あって、今日はなんだかイライラしてたの！渚に八つ当たりなんて、ウチ・・・最低だね！アハハハ！！」

びつくりした・・・あたしが森本君のことが好きなの、悠香にバシたのかと思った・・・。

「渚、やっぱね、話しかけるの、渚に付いてきてほしい・・・い

いかな？」

悠香が頼んできた。

あたしの答えは、決まっていた。

「当たり前だよっ!!」

「渚・・・ありがとう」

「何よ～～？なんか調子狂う（笑）」

「って!!何こんなトコで立ち止まって話してんのウチらは!!」

時計をみると・・・

7時9分・・・

「で・・・電車。行っちゃった・・・よね?」

悠香の言葉、疑問形だし。

・・・あたしに聞いているのかな・・・?

何て答えよう？行っちゃったでしょ、とか、そんな事ないよ、とかこたえればいいの？

とか何とか考えてたら、なぜかあたしはとっさにテキトーに答えていた。

「多分ね・・・次の電車まで待つかあ」

「あの・・・渚？次の電車は・・・1時間後だよ？？」

「えッッッ！？マジでえ！？」

あたし、驚きを隠せない。

「どうする？遅刻しちゃうよ！？」

悠香が顔をニヤつかせながら聞いてくる。

・・・嫌な予感。

「渚！！学校サボっちゃおっ！1日くらい、いいじゃんっ」

あの、あたし、まだ何も言っていないんですけど。

てゆーか、学校サボったってパパとママに知られたらどうすんの。

「え、えゝ？悠香ってば森元くんに話しかけるんじゃないのゝ？？行こゝよ学校」

「えゝ？やだぁゝ冗談だよぉ？恥ずかしいじゃん？ま、どーせ怒られるんだから、遊ばおよゝ」

噓。森元君のことは理由じゃない。

本当は・・・

親に知られるのが怖かったんだ。

卑怯だよね？あたし。

結局は自由になれないあたし。
弱虫でズルいあたし。

その証拠に悠香が森元君に話しかけないって言った時、ホッとす

る渚もいたよ。

悠香みたいに素直で純粹で強い悠香みたいになれたら、どんなにいいだろう・・・。

だけれか、助けてよ。

あたしを、この世界から、消して・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4557f/>

ドリーム ラヴ

2011年1月6日02時11分発行